

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

* チェーザレ・パヴェーゼの日記には「何月何日のところに……ということを追記」あるいは「何月何日に書いたことからは……という結論になる」といつ

た記述がしばしば登場してくる。しかも追加される内容は、当日は記さずにあ

とになって思い出した出来事ではなく、きわめて抽象的な思念である。ただひ

たすら自分の日記に読みふけっている作者の孤独な姿がありありと浮かんでく

るようだ。日記（いちいち断るのはわずらわしいので、ただ日記とだけしてお

くけれども、^{*}journal intime 正しくは個人がその内面を書き記した日記）をつ

けること自体、あるいはそれを公刊させることを、近代精神の《病》と呼ん

だポール・ブルジェであれば、病はここで極頂にまで達したと評したかもしれ

ない。だが、いかに病氣と呼ばれようとも、ある種の人びとにとって、日記は

ただ毎日つけるだけでは十分ではない。それを繰り返し読み、かつ意見を追加

してゆかなければいけないのだ。再読と記述の追加とは、日記を書くという行

為の何か本質的な部分につながっている。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

けてゆくだろう。このちがいは小さくない。保存したものが自己増殖するとい

う点で、日記を書くということは、むしろ蓄財やあるいは切手、昆虫などの収

集に似ているかもしれない。日記に記された内面と同様に、資本もまた自己増

殖をつづける——少なくとも最初からそれが消滅することは願われていない

——であり、しかもそのことを確認するために、資本家はたえず帳簿に目を

通さなくてはならない。切手の収集家もまた、日毎ふえてゆく収集品を前にし

てはくそえみ、逆に、せっかく集めたものがたつた一つでもなくなればひどく

嘆き悲しむであろう。

古代以来の日記文学の伝統のあるわが国は措くとして、ヨーロッパにおいて

は、日記の発達は商人のつける会計簿の一つの起源があるようだ。言いかえれ

ば、自己の内面を日記に綴るということは、自己を一種の財と見なして蓄積す

ることであり、それは一方で資本主義、他方で個人主義という、ともに近代ヨ

ーロッパのコンカン^aをなすとも言うべき考え方の成長をまつてはじめて現実の

ものとなった。収集がただの趣味以上のものとして行われるようになるの

も、おそらくはブルジョワ社会においてのことであって、^②ここでも同じ原理が

作動しているはずである。ただし、財の蓄積、保存とは言っても、収集や蓄財

の場合に対象となるのはいつでも他の財と交換が可能な財であり（たとえば貯

めたお金で家を^bコウニユウする）、^③したがってこの保存はまだ目的のための手

段という性格を多少とも残しているのにならして、日記に記される自己の他の

ものに変わりうる余地はほとんどない。それゆえにこそ、日記においては手段

の自己目的化が蓄財や収集にもましていつそう激しく進行するのだが。

資本家の帳簿とほとんど等価な自己の記録、^④つまり何ごとかのための手段と

して記される日記は、^⑤たしかに存在している。いやそうした日記のほ

うがむしろ多数であるのかもしれない。明日のより多くの収入を念じながら今

夜のうちに会計簿の記帳を怠らない商人と同じ姿勢で、よりよい自己の実現、

向上をめざして、とりわけ反省に多くの部分をさいて綴られる日記である。「菓

子を食ひすぎたり、菓子^cは之より断然廃すべし」と明治三〇年に記したのは^{*}西

田幾多郎であるが、殖産興業の理念が支配するこの時代に即応して発行された

博文館の常用日記のなかに同様の反省を書きつけたとは、西田以外にも少な

くはなかったたろう。ここでは明らかに、自己の内面を記録することは、免己、向上という目的に従属した手段にとどまっている。これにくらべるならば、先のパヴェーゼの日記、また「日記は私の社交界、私の仲間」であると記す*アミエルの日記は、外部への道を閉ざされ、自己の向上をめざすかわりに、ひたすら自己への沈潜・耽溺に終始している点で対照的な性格の日記である。

おそらくは、堅実な（つまり一定の目標をもった）資本家がやがて金をためることだけが目的の守銭奴にダシ、また博物学的興味から何かの収集をはじめたはずの収集家がいづのまにか集めることそれ自体に情熱を傾けるにいたるのと同じ過程でもって、向上のための自己の記録が、自己というものに執着し沈潜する日記に転じたのだった。この自己目的化あるいは自己疎外は、やはり逸脱、トウサクそして結局のところ病としか呼びえないものたろうか。そうではあるにせよ、しかし注目しなければならないのは、こうした逸脱が実は近代社会に内在する性格の縮図にもなっているという点である。たとえば美術館、博物館または古文書館など、その制度化と公開が近代以前の社会では考えられなかったのを思い出すならば、われわれの社会においては、個人のレヴェルで収集癖や日記の習慣が定着するとともに、全体としても、単純な消費の対象とはならない知識や財を記録し保存し、要するに永遠化することに多大のエネルギーが投じられているのがわかる。自己の記録に拘泥する日記の向こう側に透けて見えてくるのは、近代以降の社会に生きるわれわれに宿命的な*フェティシズムにはかならない。

日記が保存する対象は、瓶詰のジャムとは、またお金や収集品とさえ異なる、きわめて特殊な財であり、それゆえに日記は、あらゆる保存装置のうちでもっとも完全なあるいは忠実な、ということとはもつとも不幸な装置になってしまった。こうした出口のない迷路のような日記は、しかし、保存という行為の本質を何にもまして純粹に守り、いかなる現実の目的にも拘束されないだけに、逆にある種の自由ないし解放を作者にもたらしめるとは言えないだろう。日記の機能を極度に追求した日記は、自己にとって牢獄であるとともに、想像力がはばたき始める場所でもあるのだ。自己目的化ということでは共通している蓄財や収集癖も、イゼンとして事物とのつながりを残している点で、日記の純粹さには及ばない。同じく毎日綴られながらも、備忘録や反省の記録にあっては、記憶は個々の現実のなかで消費し尽くされて姿を消してしまう。これに

4

ないして、たえず自己にまつわる記憶を喚起し、それを想像力に結びつけて、存在の感覚を確認すること——これこそが、パヴェーゼのような日記作家の、自分の日記を再読し新たな記述を追加するさいの、一見したところ苦渋にみちてはいるが、それでも他の何ものにも換えがたい楽しみであったにちがいない。
(富永茂樹「都市の憂鬱」による)

(注) チェーザレ・パヴェーゼ：イタリアの詩人（一九〇八—一九五〇）。
journal intime…フランス語。ここでは「内面の日記」の意味。
ポール・ブルジェ：フランスの作家、批評家（一八五二—一九三五）。
ブルジョワ…ここでは近代ヨーロッパの有産者。
西田幾多郎：哲学者（一八七〇—一九四五）。
博文館の常用日記：出版社の博文館が明治期から発売している日記帳。
アミエル：スイスの哲学者、文学者（一八二一—一八八二）。
フェティシズム：特定の事物を極端に愛する性向。

問一——線a～eの漢字と同じ漢字を含むものを次の各群のア～オから一つずつ選び、記号で答えよ。

a	コンカン	ア 箱根のセキを越える。	イ 太いミキを切る。	ウ キモに銘ずる。	エ 入会をススめる。	オ 水がクダを通る。
b	コウニユウ	ア コウキ肅正を徹底する。	イ コウセツを問わない。	ウ 山がコウヨウする。	エ 新聞をコウドクする。	オ 日本カイコウを調べる。
c	ダシ	ア 努力はムダにならない。	イ 川がダコウする。	エ ダラクした空気。	オ ダケツ案を提示する。	

d トウサク
ア 夢と現実がコウサクする。
イ 陰でカクサクする。
ウ 文章をテンサクする。
エ 辞書のサクイン。
オ 空気をアツサクする。

ア イリヨクを発揮する。

イ アンイな考え。

e イゼン
ウ 現状をイジする。

エ 法律にイキヨする。

オ 事のケイイを説明する。

問二 — 線① 保存という作業の基本を忠実に守っている」とあるが、それは

どういうことか。最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 保存において重要なのは、現状をそのまま残すことだが、日記を後世に残すために種々の工夫をこらすパヴェーゼの行為は、現在のあるがままの事実を忠実に将来に伝えようとする営みであるということ。

イ 保存物が腐らないような密閉性の高さこそが保存の要点であるが、日記を一人の読者として点検するパヴェーゼの行為には、自己の内面を純粹に密封しようとする姿勢が見られるということ。

ウ 保存のためには、人工的に手を加えることが必要であるが、その日の日記を記すだけではなく、後から日記に記述を追加するパヴェーゼの行為は、保存に必要な加工にあたるということ。

エ 保存をするのは保存物を何らかの形で用いるためであるが、自分自分の日記を読み、場合によっては記述を追加するパヴェーゼの行為は、保存物の使用という点で保存の目的にかなっているということ。

オ 財産の保存は、その財が自己増殖していく点に特徴があるが、その日の日記を書くだけでなく、後から記述を追加していくパヴェーゼの行為は、自己をしいに増殖させていくような行為となっているということ。

問三 — 線② 「こどもも同じ原理が作動している」とあるが、何について、どのような原理が「作動」していると考えられるか。最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 近代ヨーロッパにおいて蓄財の精神が働いているのと同じように、ブルジョワ社会においても、財の蓄積を尊ぶ資本主義の原理が働いているということ。

イ 自己の内面を日記に綴る営みの背景に資本主義と個人主義の成長という原理が見られるように、趣味の域を超えた収集活動の広がりにもそのような背景があるということ。

ウ 収集はただの趣味以上のものであるが、収集活動と趣味活動の双方にブルジョワ社会を支える資本主義と個人主義の原理が働いているということ。

エ 資本主義と個人主義という二つの原理が近代ヨーロッパの基本的な精神を形成したように、その二つの原理が同じようにブルジョワ社会を形成したということ。

オ 日記の発達の起源に財の蓄積という商業活動の原理があつたように、収集活動が趣味以上のものとなっていくのも商業活動のためであるということ。

問四 — 線③ 「こうした逸脱が実は近代社会に内在する性格の縮図にもなっている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 日記が、自己の向上のための記録から、自己目的化した日記へと転じたことと、近代社会において美術館や博物館など、事物の収集それ自体に多大なエネルギーを傾ける設備が成立したことは、同じ精神にもつづいているということ。

イ 近代社会において、個人のレヴェルでの収集や自己の記録である日記が定着し、趣味以上のものとして普及したのと同様に、美術館や博物館・古文書館が制度化され、収集されたものが広く一般に公開されるようになったということ。

ウ 一定の目標を定めて金銭を蓄積していた資本家が、金を貯めることだ

けが目的の守銭奴と化したように、日記を書くことで日々の反省をして
いた日記の書き手も、自己の向上それ自体に深くこだわるようになった
ということ。

工 近代の資本主義社会で、個人が消費の対象にならない知識や財を記
録・蓄積し、保存するようになったのは、美術館や博物館・古文書館の
制度化や整備による影響から生じたことで、両者には共通の価値観が見
られるということ。

オ 自己の記録に拘泥する日記が、個人主義に根ざした病を反映する一方
で自己の蓄積と再生を目的とするように、近代以前の社会では考えられ
なかった美術館や博物館などの公開も、知識の保存と更新を目指してい
るということ。

問五

——線④「一見したところ苦渋にみちてはいるが、それでも他の何もの
にも換えがたい楽しみであったにちがいない」とあるが、ここからうかが
われる筆者の日記に対する考え方に合致するものを次のア～オから一つ選
び、記号で答えよ。

ア 保存という行為の本質を純粹に追求した日記は、出口のない迷路であ
るとともに、再読や新たな記述の追加によって想像力が解放される場所
でもある。

イ 日記を記述することは、逆に記憶を希薄にするという作用を持つが、
日記を読むことを通して、記憶を喚起し、それを想像力に結びつけて、
存在感を味わうことができる。

ウ 日記の機能を極度に追求したために、外部への道を閉ざされたような
日記は、自己への沈潜・耽溺に終始する一方で、自己を完全に保存して
くれるものとなる。

エ 日記は、蓄財や収集の場合と違い、保存した自己を他のものと交換す
ることはできないが、それだけに自己を不変のものとして保存するとい
う楽しみがある。

オ 個人が内面を書き記した日記は、自己目的化や自己疎外を通して近代
精神の病をもたらすが、一方において、知識や財を記録し、永遠化する
楽しみがある。

問六

本文における筆者の主張に合致するものを次のア～ウから二つ選び、記
号で答えよ。

ア 日記という保存装置に保存された自己も、消費される点で、瓶に保
存されたジャムと同じだが、その消費のあり方はジャムと大きく違って
いる。日記に保存された自己の場合、収集された切手や昆虫と同じく、
消費されることが最初から期待されていない。

イ 日記を書くという行為の本質的な部分にあるのは、日記を書く人物の
孤独であるため、自己を増殖させたいという願望が生まれる。その自己
増殖の結果、日記を書く行為は近代社会を生きた人間の孤独をいやし、
孤独の迷路からの解放をもたらす。

ウ 日記に記述を追加するバヴェーゼの行為は、完成しない自己の像を完
成させようとする果てしない試みである。その自己の像への執着は近代
精神の病の徴候であるが、そこには過去を再構成するばかりでなく、想
像力の領域でも存在の感覚を確認しようとする志向が潜んでいる。

エ 日記の書き手は世界にただ一人の個人であるという条件があるため、
日記の中の自己は貨幣や収集品と違って、いくら自己増殖しても他のも
のと交換できない。個人のそのかけがえのなさゆえに、日記においては、
自己の反省や克己心・向上心が記され、よりよい自己の実現に向けて努
力が語られる。

オ 反省の記録としての日記は自己の向上という功利的な目的がある点で、
商人のつける会計簿と類似する。しかし、世俗的な向上を目指す自己中
心的な功利性ゆえに、社会的、道徳的に外部への道が閉ざされることに
なり、自己に沈潜する自己目的化した日記へと転じることもなる。

カ 書くこと自体が目的化した日記は、たとえ具体的に自己の出来事が書
かれていなくても、自己増殖的な性格が強く、近代以降の美術館や博物
館などと共通の構造を備えている。ただし、日記の場合、保存の対象が
抽象的な自己の思念になる分だけ、自己目的化が純粹になる傾向がある。